

皆さま

早いもので年末になってしまいました。海外での慣れない教員暮らしも
8カ月、少し様になって来ました。

ただ予想通りとはいえ、英国人の「食音痴」はやはりすさまじく、
「粗食」がアダとなって、残念ながらそう長くは居られないなと感じています。

年末は日本に戻らずシチリアのパレルモに参ります。ノルマン人が支配した
名残の素晴らしいモザイクを楽しみにしております。

皆さまから色々励ましのお言葉を頂戴し、ありがとうございました。
ダラム便りを読んでいただいていることが、大きな励みになっています。
その8お届けします。

少し早いですが、年末のご挨拶とさせていただきます。

皆さま、良いお年をお迎えください。

増淵 文規

英国ダラム便り（その8）

[ヘンリー・ダイソン氏のこと]

11月25日の午後、ダラム大聖堂でダラム地域社会への貢献者をたたえる記念式典
がありました。毎年行われているものです。帝京大学の学友ともいう存在で、学生と
もども色々世話になっているヘンリー・ダイソン氏がスピーチをするということな
ので、軽い気持ちで参加しましたが、何と厳かな英国教会の式典でありました。近々英
国教会の実質トップ（カンタベリー大僧正）になるダラム大僧正参席のもとに儀式が
進みます。大僧正以下高位の聖職者の法衣はカトリック教会に負けない豪華なもの
です。英国教会はプロテスタントながら、豪壮・華麗な儀式の様子はどう見てもカトリ
ックにしか思えません。もちろん教義の中身も知らない私にきちんと両者の区別がで
きるわけではないのですが。

教会旗を捧げ持った中世の騎士風の儀仗隊に先導されて、まず赤を基調とする教会ガ
ウンを纏ったVIPが入場します。そこで全員着席となり式典が始まります。ゲストの
挨拶、聖職者の話、ダイソン氏の話などが続くわけですが、話の継ぎ目で必ず全員起
立しての聖歌斉唱になります。場違いのところに来てしまった私は恐縮のしっぱなし
でしたが、運よく私の近くにクリスチャンでなさそうな外国人がいましたので少し助
かりました。最後はPilgrimageで全員が大聖堂内を一周、守護神のSt. Cuthbert祭
壇の場で祈りを捧げます。

式典を通じて大聖堂内はパイプオルガンの奏でと聖歌隊の美しい歌声に包まれていま
す。ここにいて良いのかと、最後まで落ち着きませんでしたが、貴重な経験でした。
教会、地方官庁と大学が一体となって、地域社会への貢献者・団体に感謝する式典で

すが、それが英国教会儀式として行われるというのは、いかにも「政教分離」ではない英国らしいなと感心した次第です。国教会の総元締めは女王ですから。毎週火曜日の夜に **St. Mary's College** の **Dinner** に参加していますが、食事の開始と最後に **College** の校長が「・・・アーメン」と祈りの言葉を述べます。政教分離のフランスの国立大学でこれをやったら、社会問題になるでしょうね。

さて我らがヘンリーが何故スピーカーになったのか。ダラム大学の敷地、建物を総合美術館キャンパスへと変貌させた、大立役者だからです。キャンパスの至るところに彫刻があります。各カレッジ校舎内の共用スペースには、どこも場所にふさわしい絵画が飾られている。特に今年秋に完成した、大学本部ビルの1階から3階までの吹き抜け構造の廊下は主として現代抽象絵画で埋め尽くされています。日本だと相当規模の美術館の展示スペースに負けないでしょう。ダラム大学の絵画コレクションは5000点以上だそうです。

この彫刻や絵画のすべてをヘンリーが集めたわけではありませんが、最近のものはヘンリーに負うところが大きい。彼の肩書はダラム大学アート・ディレクター兼同大学 **Grey College** の **Honorary Fellow** (学友) です。自身 **Grey College** 出身で母校の **Grey** を愛してやまない。いつのころからか、まずは **Grey College** の芸術化を手掛けるようになったようです。最初は無償だったらしい。現在は大学のアート・ディレクターとして多少の報酬はあるようですが、ロンドンで画商を営む富豪 (のはず) のヘンリーにとっては取るに足らない金額。20年近くボランティアで大学をアートで飾ることに取り組んでいるわけです。ここ数年は商売の方はだれかに任せ、ほとんどダラム大学一筋に見えます。パトロンが芸術を育てるという良い例でしょう。彼は **Grey** だけでなく各 **College** で有望若手芸術家の作品を中心に展示会を頻繁に開いています。大学のコレクションには彼自身の寄贈も少なからず、億円単位の貢献でしょう。総長以下大学関係者がアートに理解が深く大変重要視しているのが、多分日本の大学とは相当違う点でしょう。国立大学共通試験の選択科目に美術や音楽が入っているというお国柄です。この辺が英国の奥深いところだと思います。恐らく英国には各界、各地にヘンリーのような人が少なからずいるんでしょう。この人たちがおカネを出したり、集めたり、自分で汗もかく。政府の金をあてにはしない。東京大学にも「奇特の人」があらわれて、アートの園に変えてくれると嬉しいのですが。

[EU と英国の距離]

長いこと **EU** は私の取り組みテーマでした。学生に教える時には特別に力が入ります。フランス人は自分を **EU** 人だと言うくらいに一体感が強い。英国人は完全に距離を置いていますね。英国ではこうだがヨーロッパでは云々という表現を良く耳にします。**EU** には入ったものの、ユーロには参加しないし、独自性を保ちたい気持ちが強い。その昔ドゴールが英国の **EC** 加盟に大反対したのも理解できます。何事につけ英国は米国と欧州大陸の中間 (**in-between**) ですね。基本的にアングロサクソンの自由主義と欧州大陸の社会民主主義の違いでしょうか。だから **EU** が2014年から7年間の中期予算規模を増やそうなどとすると英国は怒るわけです。英国人は大きな政府は嫌い。自分の国の政府支出をカットしているのに、**EU** 予算を膨らませることなどとても容認できない。英国の強い反対もあり **EU** サミットで話がつかず、予算審議は新年に持ち越されますが、1%でも増えたら英国は **NO** ですから、どうなるのでしょうか。表面的には増えない予算にして別名目で特別資金を充当するような、日本を見習った **EU** 官僚的解決策になるのでしょうか。銀行金融取引規制強化にも英国が大反対していて、

このところ英国は EU にとって反対お邪魔虫の目障りな存在です。だけど追い出すわけにはいかない。英国も EU のメリットを十分享受していますから、脅しの言葉以上の脱退はあり得ない。両者のせめぎ合いは正直面白いです。

2012年12月12日

増渕 文規